2020年度　明治大学
【経　営　学　部】
解答時間　　60分
配点　　100点

ゆ

国　語　問　題

はじめに、これを読みなさい。

1　この問題用紙は14ページある。**ただし、白紙はページ数に含まない。**
2　試験時間は60分である。
3　解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合して確認すること。
4　監督者の指示にしたがい、解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
5　解答は、すべて解答用紙の所定欄にマークするか、または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。解答欄は裏面にもある。
6　問題が指示する数より多くマークしないこと。
7　解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもＨＢ・黒)で記入すること。
8　訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
9　解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
10　**解答用紙はすべて回収する。**持ち帰らず、必ず提出すること。
11　この問題冊子は、必ず持ち帰ること。
12　解答をマークするときには、記入例を参照すること。

良い例	悪　い　例
●	◎　⊗　○

（マーク記入例）

(一)

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

いまやロボットは人工知能を備え、人間の単なる道具やその代役ではなく、完全に人間を駆逐し、とって代わりつつある。現在において不気味なのは、ロボットの遠さではなく、むしろそのあまりの近さ、人間と区別できなくなりつつあるその近さにある。ロボットが人間に急速に接近するばかりではない。人間の方でもまた、誕生から死に至るまで、医療という名の生命工学に浸透され続けており、機械抜きでは生命それ自体が危機にオチイ[a]るほどになっている。人間と機械の境界を決めようと線を引くことそのものが、無理だった、いやそれどころか無意味でさえあったのかもしれない。

ここでまず歴史的に思い返すべきことは、人間と機械の境界を確定することこそ、近代の開始を告げたデカルト哲学の使命——存在論的切断の外科手術——だったということだ。デカルトは、身体と精神、物質と非物質、延長と非延長……と延々と続く二元論による世界観を構築したが、その動機とも目的ともいえるのは、①「人間そのもの」ないし人間の「本質」から機械を、鋭利なメスで切り離し切除することだったのである。これだけでは説明として簡単すぎるかもしれないから、身体と精神の区別について少しばかり補足しておこう。身体は大きさなどのディメンションを持っているが、言い換えると「これ」とか「そこ」と指示できる対象性を持っている。精神はそうではなく、非延長であって、「どこ」に「いつ」あるかは特定できない。「機械の中の幽霊」という有名な表現があるが、現実と幽界のような区別が、デカルトによって持ち込まれたのである。

デカルトのメスの切っ先によって実現した区別は、途方もないメリットをもたらした。そのメリットとは、指示可能な延長つまりはデータに解析し尽くせる対象が人間の知性の前に出現したこと、これである。この前後で変わったのは、世界そのものだといっても決して大げさではない。あらゆる事物が、操作可能なデータの集積物に変換されたからで、これ以降すべては、一度データにしてしまうだけで、あとはそれをひたすら操作(「演算」)することで制御可能となったのだ。データさえあれば、「現実」は再現でき、コントロールできると考えられるからである。「私に固有な身体」は、実はこうして「私」の手を離れ、「身体」データとして独立してデジタル的に操作され、治療されもすれば、細胞増殖やら遺伝子操作やらと夥(おびただ)しい技術が、そこで活用され応用される。身体

は基盤であり、培養シャーレであり、データ化されて資料体となりデータベース化される。これら技術の適用は、「私」を決定不能な「精神」に祭り上げ、ブラックボックス化することで、一方の「身体」を対象とすることで可能となったのだ。精神の本質化と身体の技術化、別次元あるいは非共役的(注1)で交わることのない捻れた関係に「魂」と「体」を属させるというこの巧妙な区別が、デカルトによって基礎付けられたのだ。デカルトはこうして、存在の根底に亀裂を入れること(精神と身体をそれぞれ別のオーダーに属させること)に成功して、ガリレオ・ガリレイと並ぶ「近代」の開祖、科学革命と哲学革命の英雄となった。これがつまりは「存在論的切断」である。そして、これが「切断」であるのは、その後では、それ以前の時代にはもはや戻ることができないからである。その意味で後戻り不能な時代が始まったのであり、その時代を、「近代」と呼ぶ以上に、上のコンテクストから「存在論的機械学の時代」と呼んでおこう。存在論的機械学は、われわれの時代をその起源から特徴づけている秘められた知である。それはどのように出現し、そしていま、どのようにわれわれを支配しようとしているのだろうか。

ここで決定的に重要なのは、スピノザ学者の上野修が展開する議論である。上野によれば、近代という時代そのものが、ゲームの論理を内在化することで成立したというのだ。そのゲームは、「残りの者の論理」に支えられているという。では、その基盤としての「残りの者の論理」とは何か。デカルトの存在論的な境界設定に対して、ホッブズが近代の政治を支配するようなイメージを提示した。しかし、デカルトにせよ、ホッブズにせよ、いまだ明瞭な形では「残りの者の論理」を提示していたわけではないのである。この論理がその全貌を露わにするのは、上野によれば、ようやくスピノザの哲学実践においてなのである。天才たちの時代である一七世紀を貫いていた論理とは、いったいどのようなものだったのか？　そしてそれは、いかにして存在論的機械学の地平を開いたのであろうか。

問題はやはりというべきか、まずホッブズなのだ。彼の主著『リヴァイアサン』(一六五一年)は、全ての人間が平等であること、まるで原子のように誰もが似たり寄ったりであることを基礎にしている。平等だということは封建社会による不平等より「進歩」した革命的な考え方だが、しかし、②それを手放しで喜ぶことはできない。

人間は誰しも平等であるということは、誰も決定的な優位を一人では手に入れることができないということである。しかし、平等である以上、自分が口に出さずに考えていることは、他の誰もが考えることができる。これは当然のことだ。自分が考えていることで、残りの者たちが考えないことはない。となると由々しきことが生じる。つまり、自分の考えることはどのようなことでも、最善のことでも最悪のことでも、星空のように美しい心も、サド侯爵の描くようなおぞましい行為も、私の脳裏によぎるものは、すべて自分以外の人々の脳裏にも浮かびうるのだ。もちろん、天使のように考える人もいるだろうから、隣人は私を助けてくれるかもしれない。しかし、私を貪り食う可能性は消せないのだ。要点は、限定のない限り、自分以外の人が考えることは任意であり、その意味で隣人は、不可視の内面を持つということだ。一言でいえば、平等な社会は全員が全員に対して理論上は「他者」であり、全員がそれぞれ主体として行為する可能性を持つのである。実際上はさまざまな限定を蒙っているために、隣人は全くの他者ではない。しかし可能性としては、すべての隣人は全き他者でありうる。そしてそのことがわれわれ一人一人にとって、不安を引き起こす。不可視の内面を備えた他者に対しては、その意図や考えを想像する必要がある。こうして誰もが不可視の夜の森を想像力を頼りに手探りで進む旅人のようになる。ちょっとした物音にも人は、自分以外の全員から襲われる不安を結びつける。[3]「残りの者」への恐怖が、各人を支配することになる。平等は不安を生み続ける。

想像の世界にはまりこんだ不安な人間たちにとって、頼れるのは感覚であり、感覚によって手に入れた手掛かりからの推論のみである。推理は想像力の産物ではあるが、その核心には論理が据えられていなければならない。その論理こそ、残りの者の論理である。上野の哲学的議論は、厳密だが、高度に凝縮されているため、一読してすぐに理解できるという代物ではない。ここでは、議論の要点をできるだけわかりやすく示してみよう。

日常のモデルを考えてみよう。例えば学校のイジメ。人種差別や性差差別だと、社会の広がりの中であまりに複雑だから、ここでは「閉じた」一つのクラスルームが好都合だろう。さてそのクラスルームだが、まだ現実にはイジメは起きていないとしよう。しかし、担任が未経験の教師だとか、クラスの中に微妙にグループ間の対立が生じているとか、さまざまな要因から、スケープゴー

トが憂さ晴らしに選ばれそうな雰囲気が漂っているとしよう。自分が犠牲者になるかもしれないと誰もが緊張を感じている不安な状況だ。クラスの残りの者たちが謀って自分を標的にするなら、それに抵抗する術はない。ホッブズの大前提は、誰もが生き延びたいという「衝動」に従い、この衝動には逆らえない、というものだから、私はまさに生き延びたいという「衝動に駆られて」、残りの者たちに合わせて動き、マークされないように生きることを選ぶ。こうして、残りの者の欲望と私が想像するものに、私は「従属する」ことになる。

しかし、この状況は、耐え難い。生きることの難しいこの状況は、そもそも誰もが平等であるところから生じることは間違いないだろう。平等性は、近代を開始させ、そしてその困難をも基礎づけた。だから、権威主義的な教師だとか、田舎から転校生が突然現れたりして道化役になったりすれば、クラスの雰囲気は一変する。いうまでもなく、そこに上下関係ができ、平等の均衡が破れるからだ。もちろん、父権的抑圧や道化といった介入は、「外」からのものであるが、これらによってイジメ状況が「解決」するわけではない。抑圧されるだけなのだ。そして、解決されないままに［　Ⅰ　］は潜行し、やがて血腥い暴力(テロ、リンチ)として出現する。これもわれわれの生きている時代の姿ではある。しかしこのことは、見方を変えさえすれば、［　Ⅱ　］という構造は誰にとっても同じということを意味している。

では、このような理屈と構造が暴露され理解されるなら、不安は解消するだろうか。そうならないところに、実は④本当の問題が潜んでいる。あなたが怖がっているように、相手もあなたを怖がっている、つまりその恐怖は想像力による幻に過ぎない、従って悪夢から醒めなさい……と、仮に諭されたとしても、それで不安が消えることには決してならない。なるほど、一対一の正々堂々の決闘の場合なら、つまり対称性を持った対立の場合なら、相互性を指摘する説教も有効かもしれない。それは、ちょうど「相互破壊」の完全な対称性に基づく、核抑止力の理屈(核のボタンを押せばそれで両方お終い)であり、冷戦時代に繰り返された古典的議論と同断である。しかし、イジメの不安は、ある意味では、核戦争の不安よりも複雑でありうる。少数対多数、極端には一人対残り全員という対立から生じるのであり、どこまでも非対称で歪とさえいえるような関係である。上野の言葉を借りるなら、そこ

には「非対称性の相互性」しかない。自分にとって「残りの者」がいる以上、他人にとっては自分を含めての「残りの者」がいるほかない。言い換えれば、誰にとっても「残りの者」がいる。多数派を形成する自分は、単に残りの者への不安から少しでも逃れたいから、相対的に安全な多数派に属しているだけで、その多数派の中でも「残りの者」が消えることはない。もうこれ以上述べる必要もないが、要するに「残りの者」は誰からも独立し、イジメの不安にサイナまれる限り、クラスのどこにもいないのにあらゆるところに存在し、そうして全員を支配する。

これが、スピノザが見通したとされる、⑤ホッブズのリヴァイアサンの本質なのだ。リヴァイアサンは、単に契約(注2)で生まれるのでもなく、多数派を一般意志の幻影として、それに従うのが義務だと誤認することだけから生まれるのでもない。リヴァイアサンは、逃れようのない論理的な誤解から、訂正しようのない誤謬を「真理」として保証するために、誕生するのである。

自分が拘束されていると思い込ませる奸智。ホッブズが発見し、スピノザが定式化した近代国家を支える論理の実相がこのようなものだとすると、そのどこが「存在論的機械」なのか、まだ訝しく感じられるかもしれない。それは、むしろ何も無いが故に、どのようなものでもそこで接合されるような「空虚」「空所」ないし、端的に「場」そのものではないかと考えたくもなるだろう。しかし、そう考えるのではなく、大事なのは、それをマシンとして考え抜くことだろう。何も無い空虚に不安を感じるのではなく、この不安が実は作られ続けている生産物だということなのだ。そして何よりも重大なのは、この生産された不安が、われわれの一人一人を今度は生産し続けるという点なのだ。先ほどのイジメの不安にサイナまれるクラスの例でいうなら、イジメの標的にならないためには、各人は、残りの者たちに「合わせて」いることを繰り返し、事あるごとに態度で示していかなければならなくなる。その表明の一つ一つが、クラス全員に「記号」として認知され、蓄積され、いわば「データベース」化される。データベースは、基本的にはイジメの不安に奉仕し、それを維持するための装置である。さらに明確にしておくべきなのは、このデータベースなる装置が、われわれの一人一人に棲みつき、いわばとり憑くようにして、まるで自分とは別の存在つまりは⑥「分身」として動きだすということである。こうなると誰も元の状態には戻れなくなる。⑦ホッブズにとって真に「リアル」だったものは、全員の全員に対する戦争

状態であり、この「リアル」の侵入から社会を防衛する装置が、リヴァイアサンであった。データもまた、われわれの生死の区別を超越するという意味でリアルなのであり、自然状態を示している。

まとめておこう。重要な点は、各人は自分が、あるいは自分だけが生き残りたいという衝動で動くのだが、同時に、自分を除いた「残りの者」に従属してしまうという論理である。しかし当然にもこのことはまさにそのようにして各人が相互に現実の「残りの者」の力の一翼として現れあうということをも意味するのである。そうやって各人は互いにとっての「残りの者」の力を、何等の保証もないまま相互に実現しあってしまうわけだ。

ここで主張されているのは、リヴァイアサンが、単なる暴力装置であるとか、単なる絶対的な権威であるとかいうことではない。ホッブズはこれを「死にうる神」としているが、それは人間が死滅するときにのみ死ぬ神という意味以外ではありえないだろう。言い換えれば、リヴァイアサンは、社会において人間が生きる限り、絶対に除去できないし、それはいわば「原国家」のように人間の間を充てんする環境なのだ。

（佐藤淳二「データ・リヴァイアサンの降臨」より）

＊文中に一部省略した箇所がある。

注　(1)　非共役的……対称的でも相補的でもないこと。

(2)　契約……本文の文脈では、ある社会の成員どうしが、たとえば、互いは対等であって相手をイジメてはならないという決まりごと、ないしは不文律を、相手が理解していて、またそれを守ると信じあうこと。

問1　傍線部a、bと同じ漢字を用いた語を含むものを次の中からそれぞれ一つ選び、その番号をマークせよ。ただしbは二カ所あり、同じ字が入る。

a　オチイる

1　敵のカンセイにはまった。
2　ヒンシの重傷を負った。
3　信用もシッツイした。
4　すっかりダラクしてしまった。
5　もはやラクハクの身だ。

b　サイナまれる

1　カモクの人。
2　カレツな戦闘。
3　カコンを残す。
4　術後のケイカ。
5　動脈コウカ。

問2　傍線部①にいう「人間の『本質』」とは何か。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　精神が対象性をもっていないこと。
2　現実と幽界を区別できること。
3　知性によってデータを解析しつくせること。
4　データベース化される固有の身体のこと。
5　「私」という不可視の内面のこと。

問3　また、傍線部①はどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　機械が人間の知性にとって代わる世界を実現すること。
2　生命の存続を機械にゆだねること。
3　幽霊のような特定できない存在をデータから排除すること。
4　精神と身体をそれぞれ別のオーダーに属させること。
5　精神というブラックボックスを可視化できるようにすること。

問4　傍線部②で「手放しで喜ぶことはできない」のはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　平等なために優位性が価値を失ってしまうならば、秩序の構成において必ずしも封建社会より進歩しているとはいえないから。
2　平等ということは、自分の考えることは理論上、他のすべての者も考えるとみなすべきであり、結果として個性が失われてしまわざるをえないから。
3　平等社会では原則として、「隣人」を選ぶことができないため、職場やコミュニティでも政治的実践においては厳しく対立する可能性があるから。
4　平等社会では誰もが任意に行為を意図することができるが、そのために、他の人々の意図次第で自分だけが排除されてしまう可能性を誰も否定できないから。
5　誰もが平等で似たり寄ったりであるということは、「隣人」が私の主体性を奪いとり、自由な行動を制限される事態に至りうるから。

問5　傍線部③の「『残りの者』」にもっとも近い意味を表している語を次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

1　機械　　2　隣人　　3　権力者　　4　イジメの犠牲者　　5　権威主義者

問6　空欄Ⅰを補うのにもっとも適切な語を文中から抜き出せ。

問7　空欄Ⅱを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　平等性が抑圧される
2　自分以外の残りの者たちに従属する
3　残りの者たちが謀って自分を犠牲者にする
4　誰もが生き延びたいという衝動に逆らえない
5　権威主義によって平等の均衡が破れる

問8　傍線部④の「本当の問題」とは何か。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　集団の中で生きようとする限り、誰もがつねに「残りの者」の意志の存在を誤認せざるをえないということ。
2　集団の中で感じる自分以外の「残りの者」への恐怖は、想像力によって生みだされる幻影にほかならないということ。
3　平等の原則にもとづく対称性は、現実の集団の中では成立しない古典的議論で主張される観念にすぎないということ。
4　イジメの問題は人数の非対称性によるものなのに、完全な対称性をめざしてもかえって相互の対立を複雑にしてしまうこと。
5　集団の中では常に誰かが「残りの者」にならざるをえず、誰もが「残りの者」にされる不安から逃れられないということ。

問9　本文の3～4ページのイジメを例とした説明から、傍線部⑤の「ホッブズのリヴァイアサンの本質」を一文で述べている箇所を抜き出し、最初と最後の三字を書け。

問10　傍線部⑥の「『分身』」を、本文中のイジメの例えに用いるならば、どのようなものを指し示すと考えられるか。「自分以外の全員」という語句を必ず用いて、三十字以内で説明せよ。（句読点は一字と数える）

問11　傍線部⑦にもっとも意味が近いものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　存在論的機械
2　自然状態
3　暴力装置
4　一般意志
5　データベース

（二）次のⅠは『平家物語』の一節で、Ⅱはそれと関連する『十訓抄』の逸話である。ⅠとⅡを読んで、後の問に答えよ。なお、主な登場人物は次の四名である。

藤原多子――藤原公能の娘。近衛天皇、二条天皇の二代の后。

藤原実定――藤原公能の息子。多子の弟。通称、後徳大寺左大臣。左大将、左大臣などを歴任。

小侍従――紀光清（石清水八幡別当）の娘。藤原尹実に嫁し、夫の死後、多子に仕えている。当時の代表的女流歌人。

蔵人

Ⅰ　待宵の小侍従といふ女房も、この御所〔注1〕にぞ候ひける。この女房を待宵と申しける事は、ある時御所にて、「待つ宵、帰る朝、いづれかあはれはまされる」と御尋ねありければ、

待つ宵のふけゆく鐘の声きけば①かへるあしたの鳥はものかは

とよみたりけるによッてこそ、待宵とは召されけれ。大将、かの女房よびいだし、昔いまの物語して、さ夜もやう〳〵ふけ行けば、〔注2〕ふるき都のあれゆくを、②今様にこそうたはれけれ。

ふるき都をきてみれば　あさぢが原とぞあれにける
月の光はくまなくて　秋風のみぞ身にはしむ

と、三反a〔注3〕うたひすまされければ、大宮をはじめ参らせて、御所中の女房たち、みな袖をぞぬらされける。

さる程に夜もあけければ、大将暇申して福原へこそかへられけれ。御ともに候蔵人を召して、「侍従があまりなごり惜しげに思ひたるに、なんぢかへッて、なにともいひてこよ」と仰せければ、蔵人はしりかへッて畏り、「申せと候」とて、

物かはと君がいひけん鳥のねのけさしもなどかかなしかるらん

女房涙をおさへて、

またばこそふけゆく鐘も物ならめ③あかぬわかれの鳥の音ぞうき

蔵人かへり参ッて、このよし申したりければ、④「さればこそなんぢをばつかはしつれ」とて、大将大きに感ぜられけり。それよりしてこそ物かはの蔵人とはいはれけれ。

Ⅱ　後徳大寺左大臣、小侍従と聞えし歌よみに通ひ給ひけり。ある夜、ものがたりして、暁帰りけるほどに、この人の供なりける蔵人といふものに、「いまだ入りもやらで、b見送りたるが、c ふり捨てがたきに、d立ち帰りて、なにごとにても、いひて来」とのたまひければ、⑤「ゆゆしき大事かな」と思へど、程経⑥べきことならねば、やがて走り入りて、車寄せに、女の立ちたる前についゐて、「申せと候ふ」とは、左右なくいひ出でたれど、e なにともいふべしともおぼえぬに、をりしも里の鶏、声々鳴き出でたりければ、

ものかはと君がいひけむ鳥の音のけさしもなどか悲しかるらむ

とばかりいひかけて、やがて走りつきて、「車寄せにて、かくこそ申して候ひつれ」と申しければ、いみじくめでられけり。「さてこそ、使にははからひつれ」とて、後にする⑦所など賜びたりけるとなむ。

注　〔1〕近衛河原の大宮御所。多子が住む。
〔2〕治承四(一一八〇)年に、平清盛は平安京から福原に遷都した。
〔3〕多子

問1　傍線a～eの主語は誰か。もっとも適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　小侍従　2　女房たち　3　実定　4　多子　5　蔵人　6　作者

問2　傍線①③⑤の解釈としてもっとも適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

①
1　夜が明けないのに鳴き始める鶏の声などとても興ざめです。
2　夜が明けないうちに鳴く鶏の声などなんとも思いません。
3　恋人の帰っていく朝を告げる鶏の声など物の数ではありません。
4　恋人の帰っていった翌日の鶏の声など聞くにたえません。

③
1　名残がつきないのに鶏の声を理由にして別れるのは非情です。
2　名残のつきない別れをせき立てる鶏の声の方がつらいことです。
3　夜が明けないうちに鳴く鶏の声で別れるのは哀しいことです。
4　夜が明けないのに鶏の声が別れをせき立てるのは我慢できません。

⑤
1　これは大変な仕事だ。
2　これは理不尽な仕事だ。
3　これは苦労が多い仕事だ。
4　これは忌まわしい仕事だ。

問3　傍線②は今様歌の略であるが、今様が入っている平安時代後期の作品名を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　閑吟集
2　山家集
3　古来風体抄
4　梁塵秘抄

問4　傍線④で、実定は蔵人のどのような行為に対して感心したのか。十字以内で書け。（句読点は一字と数える）

問5　傍線⑥のよみをひらがな一字で書け。

問6　傍線⑦の意味を漢字二字で書け。

問7　Ⅰの［　　］内とⅡの［　　］内は同じ歌であるが、詠まれた状況が異なる。その説明としてⅠとⅡの内容に合致するものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　Ⅰではこの歌は多子の御所で蔵人によって詠まれ、Ⅱではこの歌は小侍従のもとから別れる時に実定によって詠まれた。
2　Ⅰでは実定のこの歌を蔵人が小侍従に伝えたのだが、Ⅱではたまたま鶏が鳴いたのを聞いて蔵人がこの歌を詠んだ。
3　Ⅰではこの歌は実定が福原へ帰る時に詠んだものであり、Ⅱではこの歌は実定が福原に帰ってから詠んで小侍従のもとに届けさせたものである。
4　Ⅰでは蔵人のこの歌に小侍従が返歌し、Ⅱでは蔵人がこの歌を詠んできたと実定に報告した。
5　Ⅰではこの歌は蔵人の歌であり、それに女房たちは涙を流し、Ⅱではこの歌は小侍従の歌であり、それを持ち帰った蔵人が実定にほめられた。